

各関係機関長 殿  
病虫害防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター  
病虫害防除所長  
(公印省略)

平成21年度農作物病虫害発生予察情報について

平成21年度農作物病虫害発生予報第13号を発表したので送付します。

平成21年度農作物病虫害発生予報第13号

平成22年2月25日  
徳島県

**.果樹**

**果樹共通**

果樹カメムシ類

1) 予報内容

発生時期 平年よりやや早い

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 前年夏～秋期における予察灯への果樹カメムシ類の誘殺数は、平年よりやや少なめで推移した。

(2) 1月に実施した果樹カメムシ類の調査(11地点×2ヶ所調査)では2地点で越冬を確認、越冬成虫数は0.09頭/m<sup>2</sup>であった。ー昨年(越冬虫を認めず)、昨年(11地点×2ヶ所の調査では2地点で越冬を確認、越冬成虫数は0.23頭/m<sup>2</sup>)と比べて越冬密度が低い。

(2) 2月19日発表の1ヶ月予報では、気温は高く、降水量は多く、日照時間は少ないと見込まれており、やや発生助長的な気象条件である。

**.野菜**

**冬春トマト**

疫病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が10.9%、発病度が0.3)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20 程度の低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。

(2) 窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので、肥培管理に注意する。

(3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。

(4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。特に、下葉には丁寧に散布する。

- (5)病原菌が侵入してからごく短期間で発病するので、発生を認めたら散布間隔を短縮して、集中的に薬剤散布を行なう。

#### 灰色かび病

##### 1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

##### 2)予報の根拠

- (1)2月後半の巡回調査では、発生圃場率が20.0%、発病度が0.2で、ほぼ平年(29.8%、5.6)並の発生である。
- (2)2月19日発表の1ヶ月予報では、気温は高く、降水量は多く、日照時間は少ないと見込まれており、発生助長的な気象条件である。

##### 3)防除上注意すべき事項

- (1)気温が20 くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2)発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (3)薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

#### 葉かび病

##### 1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

##### 2)予報の根拠

- (1)2月後半の巡回調査では、発生圃場率は80.0%であり、平年(28.5%)より高いが、発病度は2.4であり、ほぼ平年(5.2)並である。
- (2)2月19日発表の1ヶ月予報では、気温は高く、降水量は多く、日照時間は少ないと見込まれており、発生助長的な気象条件である。

##### 3)防除上注意すべき事項

- (1)気温が20~25 の比較的低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2)肥料切れは病勢の進展を助長するので、肥培管理に注意する。
- (3)罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4)病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。
- (5)薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

#### タバココナジラミ(バイオタイプB,バイオタイプQ)

##### 1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

##### 2)予報の根拠

- (1)2月後半の巡回調査では、発生圃場率が20.0%、寄生葉率が0.2%である(平年同時期は未発生)。

##### 3)防除上注意すべき事項

- (1)コナジラミ類が発生している苗は使用しない。
- (2)圃場周辺の雑草は増殖源となるので、除草を徹底する。
- (3)施設開口部(出入り口、天窓、ハウスサイド)に0.4mm以下の防虫ネットを被覆し、昇温抑制のため循環扇を設置するとともに、紫外線カットフィルム(侵入防止)、黄色粘着紙(誘殺)、光反射マルチ(忌避)などの物理的防除法を活用する。
- (4)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬液は葉裏にも十分に付着するように丁寧に散布する。
- (5)ネオニコチノイド系剤の一部、及び合成ピレスロイド系剤に対する感受性が低いことが報告されているバイオタイプQに対しては、ジノテフラン、ニテンピラム、ピリダベン、スピロメシフェン(ミニトマトには適用無し。)、デンブン、オレイン酸ナトリウム等の剤が有効であるとされている。

(6)薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

(7)栽培終了後は成虫の施設外への分散を防ぐため、薬剤防除を行ったうえで株を切断し、施設を密閉して蒸し込み、虫を死滅させる。

## オンシツコナジラミ

### 1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

### 2)予報の根拠

(1)2月後半の巡回調査では、発生圃場率が40.0%、寄生葉率が6.6%であり、平年(48.1%、5.7%)並の発生である。

### 3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

## 冬春ナス

### 灰色かび病

#### 1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

#### 2)予報の根拠

(1)2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が9.0%、発病果率が0.3%)。

(2)2月19日発表の1ヶ月予報では、気温は高く、降水量は多く、日照時間は少ないと見込まれており、発生助長的な気象条件である。

#### 3)防除上注意すべき事項

(1)気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。

(2)朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。

(3)発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。

(4)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

(5)薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

## うどんこ病

### 1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

### 2)予報の根拠

(1)2月後半の巡回調査では、発生圃場率が33.3%、発病葉率が0.3%である(平年同時期は未発生)。

### 3)防除上注意すべき事項

(1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。

(2)罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。

(3)薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

## すすかび病

### 1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少～中」

### 2)予報の根拠

(1)2月後半の巡回調査では、発生圃場率が50.0%、発病葉率が9.3%であり、ほぼ平年(67.3%、12.6%)並の発生である。

(2)2月19日発表の1ヶ月予報では、気温は高く、降水量は多く、日照時間は少ないと見込まれており、発生助長的な気象条件である。

### 3)防除上注意すべき事項

- (1)気温が25 くらいで多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤が下葉の葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (3)薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

## アブラムシ類

### 1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

### 2)予報の根拠

- (1)2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期も未発生)。

### 3)防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

## ミナミキイロアザミウマ

### 1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

### 2)予報の根拠

- (1)2月後半の巡回調査では、発生圃場率が16.7%、寄生葉率が0.2%であり、ほぼ平年(9.3%、0.9%)並の発生である。

### 3)防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2)花器、新葉、葉裏、葉の重なった部分などに集まる習性があるので、それらの部分に薬液が十分かかるよう、丁寧に散布する。
- (3)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

## オンシツコナジラミ

### 1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

### 2)予報の根拠

- (1)2月後半の巡回調査では、発生圃場率が33.3%、寄生葉率が2.5%であり、ほぼ平年(19.0%、1.9%)並の発生である。

### 3)防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

## ハダニ類

### 1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

### 2)予報の根拠

- (1)2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が2.0%、寄生葉率が0.1%)。

### 3)防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

## 冬春ハウレンソウ

### べと病

#### 1) 予報の内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

#### 2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では,発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が21.0%,発病度が3.8)。
- (2) 2月19日発表の1ヶ月予報では,気温は高く,降水量は多く,日照時間は少ないと見込まれており,発生助長的な気象条件である。

#### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 品種は,本病レース1~7に抵抗性があるものを利用する。
- (2) 葉が繁茂すると被害が多くなるので,肥培管理に注意する。
- (3) 春先の病勢の伸展を抑制するため,薬剤は予防的に用いる。
- (4) 薬剤は予防的に,また下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に散布する。
- (5) 罹病株を圃場に放置すると,次作の第一次伝染源となるので,発病株は速やかに処分する。また,春先に萎縮して奇形となった株はべと病に感染しているため,速やかに処分する。

### アブラムシ類

#### 1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年よりやや多い),発生程度は「少~中」

#### 2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では,発生圃場率が90.0%,発生程度指数が22.5であり,平年(23.9%,1.0)と比べて発生が多い。

#### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているため,薬剤が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

## 冬春イチゴ

### 灰色かび病

#### 1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

#### 2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では,発生圃場率が14.3%,発病果率が0.4%であり,ほぼ平年(8.4%,0.3%)並の発生である。
- (2) 2月19日発表の1ヶ月予報では,気温は高く,降水量は多く,日照時間は少ないと見込まれており,発生助長的な気象条件である。

#### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃程度の低温で多湿の時に発生しやすいので,施設内が過湿にならないように換気を図る。
- (2) 発病果は伝染源になるので,速やかに圃場から持ち出し処分する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため,同一系統の薬剤の連用は避ける。

### うどんこ病

#### 1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

#### 2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では,極一部に発生が多い圃場も見受けられたが,発生圃場率が14.3%,発病葉率が0.0%,発病果率が0.9%であり,概ね平年(6.8%,0.1%,0.3%)並の発生である。
- (2) 2月19日発表の1ヶ月予報では,気温は高く,降水量は多く,日照時間は少ないと見込まれており,発生助長的な気象条件である。

### 3)防除上注意すべき事項

- (1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2)古葉を早めに除去し、葉裏に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (3)罹病した果実や茎葉などは早期に見つけ、除去した後圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (4)薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

### アブラムシ類

#### 1)予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年よりやや多い)、発生程度は「少」

#### 2)予報の根拠

- (1)2月後半の巡回調査では、発生圃場率が28.6%、寄生株率が3.1%であり、平年(9.8%、0.8%)と比べてやや多めの発生である。

#### 3)防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

### ハダニ類

#### 1)予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並)で、発生程度は「少～中」

#### 2)予報の根拠

- (1)2月後半の巡回調査では、発生圃場率が64.3%、寄生葉率が6.8%であり、平年(29.4%、3.8%)と比べてやや多めの発生である。

#### 3)防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

### .その他

- 1.施設栽培において暖房機の最低気温の設定値を下げ過ぎると、低温性病害の発生を著しく助長する恐れがありますので、ご注意下さい。
- 2.薬剤の使用に当たっては必ず使用基準を遵守し、周辺作物等へ飛散しないようにして下さい。

### 発生量の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病害虫防除所  
テレホンサービス：0883(26)1199  
U R L : <http://www.green.pref.tokushima.jp/boujyosyo/>

病害虫の発生予察情報、発生状況、防除法等をお知らせしています。